



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	戦後日本の保守主義の研究：福田恒存と江藤淳の考察を中心に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	村部，貴浩
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第16319号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95247
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	MURABE_Takahiro_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：村部 貴浩

審査委員	主査	教授	金山	準
	副査	教授	斎藤	拓也
	副査	特任教授	鈴木	純一

学位論文題名

戦後日本の保守主義の研究―福田恒存と江藤淳の考察を中心に―

本論文は、保守主義が政治思想として定着しがたいとされる日本の近現代史、とくに戦後日本の保守主義思想について、福田恒存と江藤淳という二名の知識人を中心に検討することを目的としている。

本研究は序章を含む全六章からなり、まず序章では、戦後日本の保守主義をいかなる視点から問題にするかという問いの所在が語られる。それは端的には、保守すべき伝統がすでに自明ではないところで伝統の保守を語るという「逆理」であり、またとくに保守種が政治思想として定着しがたい（その意味で「逆理」がより深刻に現れる）日本の保守主義の特殊性である。

本論部となる第1章では福田の思想について、とくに「一匹と九十九匹と」にみられる「政治」と「文学」の関係から、彼の個人観を中心として検討している。第2章では江藤の思想について、もともとは政治の過剰を警戒し個人の重要性を論じていた江藤がアメリカ体験を経てその思想を変容させていく過程を分析する。第3章ではふたたび福田の個人観について、その清水幾太郎批判を中心に検討され、第4章では江藤「成熟と喪失」を中心として「父の原理」と「母の原理」について論じられる。第5章は以上を総括して、福田と江藤の思想的な共通点と差異について整理がなされる。

本論文の第一の貢献は、戦後日本を代表する保守の思想家として知られるものの、まとまった研究はいまだ十分になされたとは言えない福田・江藤の両思想家について、その著作と思想を広く包括的に検討した点にあるといえよう。そしてその分析において、彼らが重視する「個人」観にとくに着目しつつ、両思想家の類似性と相違とを描き出したことが本論文の第二の意義に挙げられるだろう。

本論文に関する審査は2025年1月17日10時30分から12時まで、学院105教室において行われた。まず冒頭に筆者から25分程度で本論文の概要と主旨が説明

され、そののち質疑応答を実施した。質問は大別して三つの視点からなされた。すなわち、（一）本論文の根本的な問い、論理的な一貫性、論文としての貢献、（二）本論文による福田・江藤解釈の妥当性、（三）鍵となるいくつかの概念の内実、である。主なものを挙げれば、保守主義の「逆理」に対して、結局のところ福田や江藤はどう対応したのか、という問いが審査委員よりなされた。これに対して著者からは、この「逆理」は保守主義を特徴づける契機の一つとして挙げたものであり、それへの答えそのものは論文の狙いではない、言い換えると本論文からすればこの逆理そのものを論理的に解決することが両思想家の狙いではない、と応答された。また本論文でも確認されるように、福田の論説を支えるのが稀代のレトリシャンともいわれる文学的センスであったとするならば、個人的な才や芸という以上の普遍的意義をそこにどう見出したらよいのか、という質問がなされた。これについては、絶対者不在の日本において依拠しうるものは何かという問いそれ自体のもつ意義が筆者から答えとして提示された。あるいは、福田による「生産者」への称揚はテキストから確認できるとして、それを他の著作で福田が論じる強い個人の具体例と考えてよいのか、という問いがなされた。筆者からは、テキスト内で明示的に述べられているわけではなく、福田のテキスト全体を再構成する中での筆者の解釈である、と応答された。他にも、父の原理、母の原理、治者などの概念や、両思想家と戦後日本の保守主義全体との関係などについて質問がなされ、それぞれについて著者からは丁寧な回答がなされた。

質疑応答終了後、審査委員内で以上の議論を踏まえて慎重に審議を行った。審査委員からは本論文の検討の緻密さや広範さについては高い評価がなされる一方、論文としての論理的な整合性や一貫性については改善の余地があるとの指摘もなされた。ただしそれは、文学者による必ずしもつねに論理的とはいえない文章から思想を再構成しようとする本研究の野心的な狙いゆえの困難でもあり、本論文の意義を損なうものではないと判断された。以上より、本論文は本学院博士学位に値する水準に十分に達していると判断した。